金沢猫

今から８００年程前、六浦港（今の平潟湾）に三艘と言う船着場がありました。

ある年の秋、村人が畑仕事をしていると、畑の真ん中に何か大きな物を見つけました。近寄ってみると、かなり年を取った大きな猫が死んでいました。その猫の顔は何となくほほ笑んでいるように見えました。それは村人達が、いつも可愛がっていた猫でしたので、畑に埋め、花を供えてお経をあげました。そして、故郷を遠く離れた日本で、沢山の可愛い子孫を残し、唐の国に帰ることなく死んだ猫のために祈りました。

その何年か前

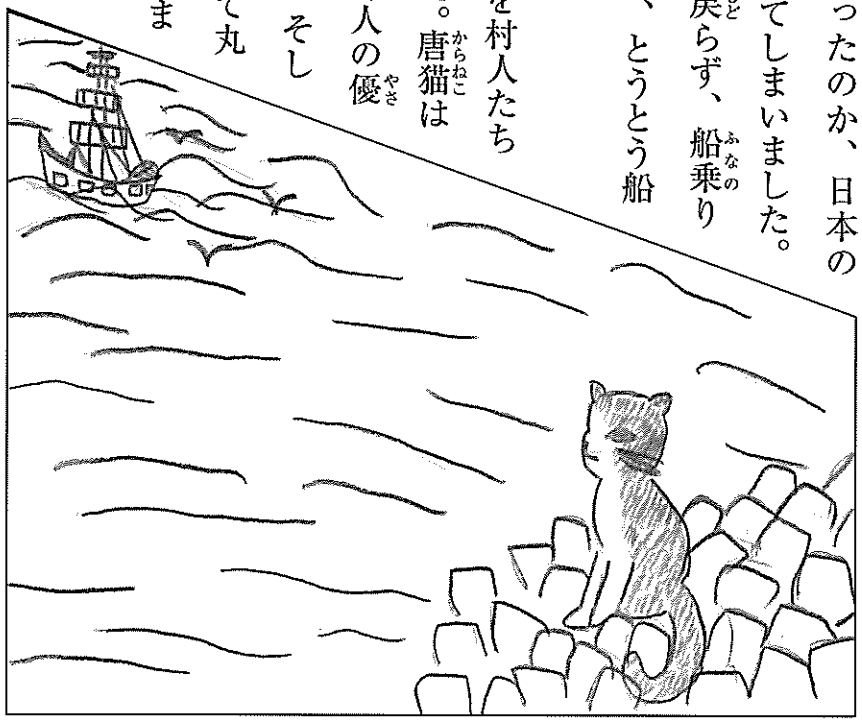
この猫は「からねこ（唐猫）」と言いました。その名のとおり、唐（今の「中国」）から船にのって来ました。毛の色は白、黒、黄色の三色で、尻尾は日本の猫より長くとても大きな猫だったそうです。

当時、金沢を治めていた、学問の好きな北条実時と言う武将が、その頃、栄えていた唐の国からたくさんの品物を船で三艘の港に運んでいました。その時、大切な品物がねずみにかじられるのを防ぐため、一匹の唐猫が一緒の船に乗せられて来ました。

唐猫は、長い船旅がとても退屈だったのか、日本の港に着くと真っ先に船から飛び下りてしまいました。そして、船が唐へ帰る日になっても戻らず、船乗りたちが一生懸命探したが見つからず、とうとう船は帰ってしまいました。

船に乗ることが出来なかった唐猫を村人たちは可哀想に思いとても可愛がりました。唐猫は生まれた国へ帰れませんでしたが、村人の優しさに包まれて幸せに暮らしました。そして、この辺りの猫と仲良くなり、やがて丸い目をした可愛い子猫がたくさん生まれました。

この子猫たちは「金沢猫」と呼ば

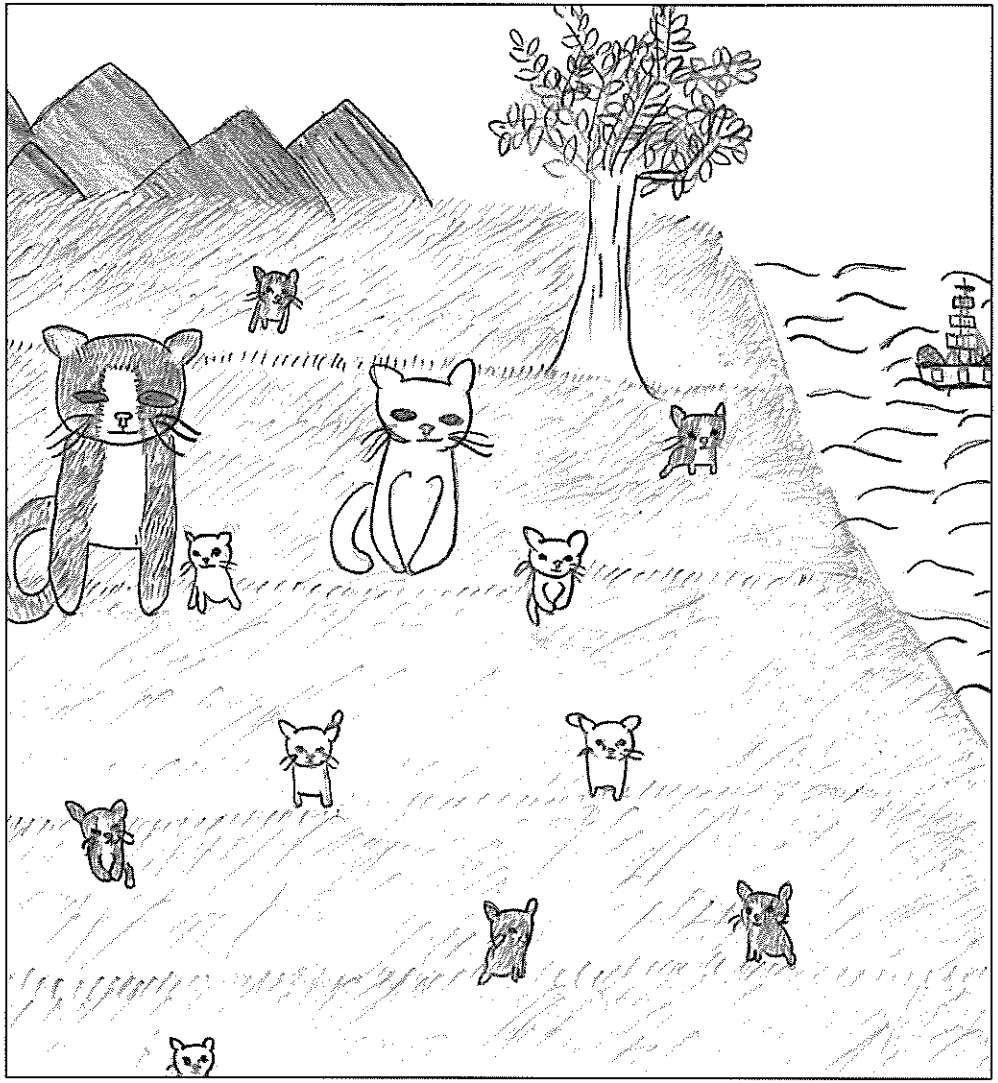


れ、この辺りにいた猫と違い尻尾の短い三毛猫でした。背中を撫でると、普通の猫とは反対に背中を持ち上げるので、それがまた可愛いと珍しがられ、その愛らしさと珍しさで全国で評判になり、「カナカナ」と呼ばれ、どこへ行っても可愛がられたそうです。

・・・そして今

「唐猫」の死んでいた畑は「ねこ畑」と呼ばれ、今でも六浦荘団地の裏山に名前が残っています。その後、千光寺と言うお寺の境内に供養のための「ねこ塚」が造られました。千光寺が昭和58年に東朝比奈へ引っ越した時、一緒に移り、今ではそこに三角形の石が「ねこ塚」として樹の茂みの中にひっそりと建っています。

もしかしたら、みなさんの近くで「ニャー」と鳴いている猫も唐猫の遠い子孫かもしれませんよ。



文　氏家　總子（ふさこ）
絵　大谷　朋代（ともよ）